

# 宗教研究

第 96 卷

403

第 1 輯

## 論 文

西村 則昭：ラカンのジョイス論と道元の「身心脱落」	1
小林弥那美：キルケゴールの愛の理論における他者の個性と平等性	25
佐藤 友紀：近代エジプトにおける国家と宗教の関係の変容	51
羅旋超(道悟)：唐代の住寺形態について	77
藤井 麻央：明治期の黒住教からみた教派神道の展開	99
呉 佩遥：迷信と信仰のはざま	123

## 書評と紹介

山中 弘：伊達聖仲編著『ヨーロッパの世俗と宗教』	147
市川 裕：久保田浩ほか編『越境する宗教史』上巻・下巻	154
伊達 聖仲：奥井智之著『宗教社会学』	166
鈴木 正崇：長谷千代子ほか編『宗教性的人类学』	173
小林奈央子：鈴木正崇著『女人禁制の人類学』	178
田中 雅一：間永次郎著『ガーデンイーの性とナショナリズム』	185
伍 嘉誠：松谷暉介編訳『香港の民主化運動と信教の自由』	191
杉木 恒彦：下田正弘著『仏教とエクリチュール』	198
深澤 英隆：吉永進一著『神智学と仏教』	205
辻口雄一郎：岡島秀隆著『対話哲学としての道元思想』	212
永岡 崇：石井公成監修、近藤俊太郎・名和達宣編『近代の仏教思想と日本主義』	218
繁田 真爾：近藤俊太郎著『親鸞とマルクス主義』	225
菊池 正治：大谷栄一ほか編『吉田久一とその時代』	232
何 燕生：飯島孝良著『語られ続ける一休像』	240
星野 靖二：村松晋著『近代日本のキリスト者』	246
吉野 亨：吉川雅章著『宮座儀礼と「特殊神饌」』	252
安藤 礼二：小田龍哉著『ニニフニ』	258
稲村めぐみ：鎌田東二編『身心変容と医療／表現～近代と伝統』	263

日本宗教学会

2022年6月

# JOURNAL OF RELIGIOUS STUDIES

Vol. XCVI-1

No. 403

## CONTENTS

### Articles

NISHIMURA Noriaki, Lacan's Discussion on Joyce and Dōgen's "Dropping off Body and Mind".	1
KOBAYASHI Minami, Individuality and Equality of Others in Kierkegaard's Works of Love.	25
SATŌ Tomonori, Changes in the Relationship between State and Religion in Modern Egypt.	51
RA Seichō (Dōgo), Forms of Temple Life in the Tang Dynasty.	77
FUJII Mao, The Evolution of Sectarian Shinto through the Lens of Kurozumikyō Discourse of Self-Definition in the Meiji Period.	99
WU Peiyao, Between Superstition and Faith.	123
Book Reviews.	147

JAPANESE ASSOCIATION FOR RELIGIOUS STUDIES

June 2022

飯島孝良著  
『語られ続ける一休像』

——戦後思想史からみる禅文化の諸相——

ペリカン社 二〇二一年七月刊

A5判 三八二頁 五八〇〇円＋税

何 燕 生

一 一休について語る時、評者がいつも想い起こすのは、中国の  
 済公和尚のことである。

済公和尚とは、呼び名で、實際の名を道済といい、伝記もきちんと残っている南宋時代の僧侶だが、肉を食い、酒を呑み、仏教の戒律を平気で犯す「破戒僧」でありながら、人々から親しく「済瀬和尚」「済公活仏」などと呼ばれ習われ、風狂な生き方を送った、いわば中国版の一休である。済公和尚の風狂な生き方が中国の小説のキャラクターとして、しばしば作品に登場し、さらには連続テレビドラマの主人公として取り上げられ、今日の一般庶民の間でも人気者となっており、この点で日本の「一休さん」とも共通している。

否、済公和尚に限らず、中国仏教の歴史をざっと振り返ってみると、古くは梁代の宝誌、日本では七福神の一つとして親しまれている唐末五代の布袋和尚、さらには同じ唐代の寒山や拾得、ないし近代の曼殊和尚なども風狂に生きた僧侶として存在

していたことが分かる。しかも、注意すべきは、彼らは風狂僧としての生き方を送りながら、多くの場合は漢詩に造詣が深く、芸術的な才能の持ち主であり、仏教教団の体制内から離れて、「体制外」を生きようとしていた点が共通しているということである。

仏教の長い歴史からすれば、そうした風狂僧は教的には決して多くはないが、ある時代になると、必ずと言ってよいほど一人、二人は現れ、その言動はたちまち注目され、様々なジャンルから語られ、庶民の人気者となり、その名を歴史に残すこととなる。一休もその一人である。その意味で風狂という一休の生き方は仏教の歴史の中では決して個別の特殊な現象ではないということが言える。もちろん、それらには虚構の部分が多く、必ずしもすべて史実ではなかったが、フィクションとして語らざるを得ない必然性があったとすれば、その必然性とはそもそも何であるかを探ることが必要であろう。

しかしながら、これまで「風狂僧の仏教史」という視点は確立されてこなかった。近代的学問研究の特徴は「合理性」「進歩」「史実」を重んじる点にあり、そのような眼差しからすれば、体制内の仏教者と異なる脱体制の風狂僧が「外れ者」として見做され、その伝承は当然フィクションとして切り捨てられることになる。「中国仏教史」における済公和尚がそうであったように、「日本仏教史」における一休の扱い方も基本的に同様であり、正面から扱われることがほとんどなかった。

しかし、一休の場合は、戦後の日本において、一部の知識人から新たに注目され、一休の風狂な生き方が新しい文脈で読み直され、評価されることになった。つまり、禅や文学、史学、思想史などのジャンルから一休が語られるようになり、一種のブームともいえるべき現象を呈していたのである。

では、戦後の日本において、一休が読み直されるようになったのは、そもそもなぜであろうか。言葉を変えて言えば、戦後の日本において論じられてきた一休像とは一体どのようなものであるか。これらは評者がかねてから関心を持っていた問題で、すこし触れたこともあるが、本書は書名の通り、正面からこれらの問題を扱った本格的な研究であり、注目に値すべき成果と考える。

「あとがき」によれば、本書は著者が東京大学大学院人文社会系研究科に提出した博士学位論文「一休の『像』の戦後史」を基に、加筆や修正をして刊行されたものであるという。通説したところ、本書は、明確な問題意識のもとに、先行研究をきちんと理解し、整理・分類を行いながら、所期の問題の解明に取り組もうという研究姿勢を貫いていることが認められる。問題意識が鮮明で、史料の扱いも客観的であり、意欲に満ちた新説が多く提供されており、一休研究が新たな段階に入ったとの手応えを確かに感じる。本書に注目したゆえんはここにある。

## 二

さて、本書は序論と、本論に当たる四章および補論、終章から構成されている。まず各章の内容を簡単に紹介してみよう。

序論「一休の（像）は如何に形成されてきたか——室町期から戦後日本へ——」では、著者も自ら関わっている近年の一休

研究の動向を踏まえ、「一休の（像）が一休の在世時から戦後に到るまで多様に変遷していることをあらためて検討」（一二頁）しつつ、他方では、「これを『禅』のイメージの多様な変遷として文化的ないし思想的に読み解くこと」（同上）をその目的としている。

このような観点に立ち、著者は、まず一休研究の意義を論じる。しかし、虚像に満ちた一休の「像」を排除するのではなく、むしろそれを積極的に受け止め、「史実はどうあれそのような『物語』が語り継がれてきたことそれ自体」（二五頁）が着目されるべきであるとその研究姿勢を表明する。著者によれば、それこそ「ひとつの『歴史』『物語』を形成してきた」からであるという。それらを指摘した上で、続けて、一休の生涯、その著作とされるもの、現代の注釈類などが検討されるとともに、戦後の知識人らによる一休の（像）の形成過程が辿られていく。

本書の問題意識に直結する内容として、先駆的な業績とも言える芳賀幸四郎や唐木順三による「禅僧」としての一休論、川端康成のいわゆる美しい日本の国づくりの貢献者としての一休の言説、水上勉の文学創作によるキャラクターとしての一休の（像）の創出、加藤周一の日本文学史論による「日本的なもの」としての一休の捉え方などがそれぞれ取り上げられ、具体的に論じられている。禅学や文学、歴史学、思想史などのジャンルにまたがるこれらの知識人の立場は当然異なり、したがって、それぞれ依拠する文献にも偏向が見られ、それによって捉えられた一休の（像）も当然一致しないはずである。しかし、戦後

におけるそうした一休の言説は、「戦後」という歴史的「事件」を転機として、それぞれの内実での「近代」を対置しようとするものであり、それぞれの「語り」は、「反皇国史観や新たな共同体論の構想がみられたり、乱世を大胆不敵なほど唾棄してやまない主体性が見出され得る」（八八頁）ことを背景としていると著者は指摘する。著者によれば、一休は戦後において「きわめて普遍的な『批判精神』の象徴と看なされていった」（八九頁）という。これは本書全体を貫いている見方であり、つづく本論各章はそのような見方に立って、個別的事例の具体的な検討が展開されていく。

第一章「一休像の近代的『発見』——前田利謙の『禪』を手がかりに——」では、「一所不住の徒」と自称する前田利謙（一八八八—一九三二）の人間論と、禪者としての一休像について検討される。前田利謙は若くして亡くなったため、無名に近い知識人であった。そのため、本章では前田利謙の生涯について詳しく紹介しているとともに、居士として熱心に参禅した経験、文人らとの幅広い交流、とくに臨済や莊子、一休に見出される「自由」な人間像への追求などについて具体的に考察されている。前田は生前に『臨済・莊子』を刊行し、後に増補され、『宗教的人間』という書名で刊行され、一時期ブームと言われるほど多くの読者の共感を得たが、著者によれば、前田利謙は近代的な視座から禪を受容した一典型であり、前田による臨済論や莊子論、とくに一休に着目された「一所不住」という所論は近代における「自由」の精神の語りの先例だったのであり、その問題意識が本書で分析する芳賀幸四郎、市川白弦、柳

田聖山らによって継承されたという。前田利謙は戦前期に生きていた人物であったが、そのような観点を踏まえて考えるならば、第一章で前田利謙を扱うのは妥当な構成であると認められる。

続く第二章では、「戦後日本における中世禅文化論と一休の像——芳賀幸四郎を中心に——」という題で、戦後における事例の最初の考察対象として、人間禅教団の師家としても知られる中世文化史家の芳賀幸四郎の一休論が取り上げられる。芳賀幸四郎は戦時期から戦時体制へ批判の目を持ち、一休のいわゆる「狂」に共感を覚えた歴史家である。本章は、まず芳賀幸四郎における中世文化史研究と禪の研究について、戦前の著述である『東山文化の研究』などを通じて、その「反皇国史観的意義」を浮き彫りにする。続けて、芳賀の戦後の代表作である『中世禅林の学問および文学に関する研究』を取り上げ、中世文化史における一休の存在意義に着目する芳賀幸四郎の中世文化史観を考察する。著者によれば、芳賀の一休論の特徴は、「御落胤でありながら、階級をまたいで縦横無尽に世の腐敗を批判した一休こそ、『東山文化』の象徴とされた」（九三頁）点にあるという。また、「芳賀のこうした意識は中世文化史論においてばかりでなく、戦後日本がもてはやしてきたデモクラシーやヒューマニズムを『禪』から再考しようとしていた点に繋がるものであった」（一九七頁）という。この指摘は、次章で検討される市川白弦などの所論から見れば、卓見と言えよう。

第三章は「市川白弦の一休像——『即』の論理の批判的継承として——」であり、本章の内容の一部は本誌で発表されたことや戦後の一休論にとどまらず、より普遍的・通時的な問題として浮かび上がってくるのではないかと考えたからである。

続けて、第四章は「二十世紀の『禅学』と一休像——柳田聖山の視座を再考する——」と題し、禅研究の分野で大きな業績を挙げた柳田聖山に着目する。柳田聖山の禅研究について、評者がかつて検討したことがあり（何燕生「近代的な物語における臨済および『臨済録』——方法論的考察」、『臨済禅研究の現在——臨済禅師一一五〇年遠諱記念国際学会論文集』禅文化研究所、二〇一七年）、詳細は省くが、柳田の禅宗史観には「唐を重んじて宋を軽んじ」、宋代の禅宗は唐代禅が「異化」したものであり、取るに足りない「体制化」した禅であるという鮮明な自我と個性があふれている。そして、その鮮明な個性は、臨済研究にも反映され、柳田は「一方で臨済義玄を一宗一派の祖とすることに反対し、臨済を伝統的な宗派観念から解放して一箇の『歴史的人物』としてその本来面目に還すべし」と訴え、その一方で、臨済に対して想像をふくらませ、その人格を理想化し、さらには偶像視するにまでいった。そうした見方は後半生の柳田による一連の一休研究や良寛研究でも貫いており、臨済や普化、一休、良寛のような生き方に自己の夢を求めようとしたことがその禅研究の特徴であると考えられる。

しかし、本章はさらに一歩進んで、深く掘り下げようとしている。紙幅の関係で詳細を紹介することはできないが、端的に言うならば、著者は、柳田がこれまで自ら用いていた手厳しい文献批判的手法を放棄し、『狂雲集』などにおけるエロティックな描写すべてを詩的表現、文学的表現と見做し、文面通り取

とがあり、評者はそれを読む機会があったが、それを踏まえた内容となっている。検討対象の市川白弦は臨済宗の僧侶で、一休の精神に学びながら、戦時体制への反省と激烈な批判を行っていたが、その立場や思想はこれまで注目されることは稀であった。海外の研究者によって取り上げられ、九〇年代に入ってから、初めてその存在を知る研究者が多かった。市川は明治三五年に生まれ、昭和六一年に亡くなり、いわば激動の時代の最中を生きた「歴史の証人」とも言うべき人物である。その意味で、戦争責任を反省した市川の代表作である「仏教者の戦争責任」の意義が大きい。しかし、市川は単に自己反省として戦争責任を追究しようとしているだけではない。その批判には一つの媒介があったのであり、著者によれば、それは西田幾多郎や鈴木大拙における「即」の論理、とりわけ小笠原秀実における「般若空」のアナキズムであるとする。したがって、市川にとって、一休は「原点ヒューマニズム」を体現しようとした一つの範例であり、要するに、「一休の『風流ならざる処も也た風流』の精神——ドロドロとしたところで生き抜こうとする——がそのまま高邁な自在洒落の境涯ともなること——を指定する」（九四頁）ものだったと著者は分析する。非常に鋭い指摘であり、本章において、このような卓見と思われる分析が多く散見される。しかし、「附記」として、章の終わりに指摘した千本組の話や任侠とアナキズムと映画と禅という現象が、個人的にはむしろ興味深かった。なぜならば、それを黒澤明の映画における「侍」の表象や山田洋次の『男はつらいよ』における「寅次郎」の生き方と結びつけて考えると、問題は単に禅僧一休の生き方

るべきではないとの態度を取ってきたことに異議を提示する。つまり、一休のような破戒やエロスについて、「歴史学かつ文献学で探求されるものであると同時に、公案に打ち込むことでしかわからぬ体験知でもある、というものである」(九四頁)という柳田の研究姿勢に賛同できないという立場である。その背景について、著者は、久松真一と鈴木大拙への強い憧憬の念が横たわっており、とりわけ久松真一による影響を指摘する。したがって、柳田の一休像とその問題意識としての禪の捉え方には一種の自己矛盾というか、二つの「禪学」が併存していると著者は主張する。各時期の著述を逐一丹念に検証し、豊富な論証に裏付けられた結論であるため、説得力があろう。

以上が本書の主な内容である。

「補論」として、「『瞎驢辺滅却』をめぐる——一休と臨済禪への研究覚書——」では、臨済が臨終の際に発した言葉として、「臨済録」に見える「瞎驢辺滅却」を手がかりに、臨済の根本精神に対して、そもそも一休がどのように捉え、どのように自らの宗派のあるべき姿を考えていたのかを考えようとするものである。著者の言葉を借りて言えば、それは「柳田の分析を超えて、本論の視座から在世当時の一休そのものにも肉迫」(九五頁)しようとするためであり、「この語に対する一休の姿勢そのものに、『風狂』とされた一休が如何に伝燈を意識し法統を自負しようとしていたかが見えてくる」(同上)という。このような立場から、著者は、「臨済録」を始めとする語録類からこの語の原意を確認し、そのうえで日本の宗門における理解として、一休の「狂雲集」における理解、言外や一休の師で

ある華叟の言説および一休の弟子たちの解釈について、それぞれ検討している。それらの分析を通して、著者は、この「瞎驢辺滅却」という語は一休の禪風を考える上で根本であり、決して柳田聖山が指摘しているように「臨済は三聖のようなつまらん弟子の境地に絶望して死んだ」ことを示す語(三四六頁)ではなく、「興ってこそ滅し、滅してこそ興る」(三四五頁)という精神が臨済から一休へ、そして弟子たちへと「的々」法燈が伝えられていたということの意味するものであると主張する。要するに、「狂雲集」からみた限りでは、「瞎驢辺滅却」を強調する一休の意図は、臨済禪の正統を自ら担う決意を表明しようとした点にあるとことである。それは、「既存の『形』を徹底的に批判し解体した先に、自らの禪道を打ち立てんと試み続けること」(三四七頁)、これこそ「殺仏殺祖」の臨済禪を体現する「瞎驢辺滅却」の一休を端的に言い当てたものではないか(同上)と著者は結論づける。広範な史料を用いて、丹念に辿られる秀逸な論考であり、「補論」としては、もったいないという気持ちになる。

終章「禪門と俗世と一休の像——論のむすびとひらき——」は、本書で検討してきた問題を踏まえながら、今後の一休研究と禪文化研究についての展望を述べる。著者は、宗門の中で語り継がれてきた一休論と民衆の中に積み重ねられた一休論の二つを「伝統」の一休の像、そして、本書で検討してきた近現代の知識人たちによる一休論を「近代」の一休の像とし、この二つの「語り」をいま一度収集して分析することが必要であり、その先に「新たな一休研究と一休像研究が展開し得る」(三五

三頁)との見解が示されている。著者はそれを「一休学」を構想することであるとし、論を結んだ。

### 三

以上、本書各章における内容を概観した。何と云っても、本書は斬新な視点による一休研究の最新の成果であり、この点をまず高く評価したい。そして、議論されている問題は単に禪仏教の領域に限らず、思想史、政治史、文学史、文化史などに及び、多くの分野から興味を持てる豊富な内容となっている点も本書の特徴と言えよう。しかし、それにしても、各章において、論を進めるために、禅研究という分野のみにとどまらず、国内外における他分野の学説、社会学、宗教学などの分野の研究動向や最新の学説などを本文中に取り入れて論じたり、または注釈の形で説明したりしており、著者の読書量の多さに驚かされる。

他方、本書を通読して、些か気になった点もある。例えば本書の構成である。如何なる事情によるのか不明であるが、一書として見た場合、序論が占める量は全書の四分の一であり、「補論」を除けば、三分の一になるという構成では、やはりアンバランスと認めざるを得ない。一冊の単行本としても十分な内容であるだけに、もうすこし工夫してもよかつたのではないか。そして、次は書名に用いられている「戦後思想史」という用語である。これまでの日本思想史研究では、必ずしも本書で取り上げたような四人の知識人が思想史研究の対象として見做されているとは言えないように思われる。とすれば、それを用

いる場合、何らかの説明が必要であろう。その点から、「禪文化」という概念についても、同様に説明する必要がある。もし、「禪文化」を一休に関わる諸事柄(文学、芸術など)を指しているとするれば、臨済の精神を真に受け継いでいると自負する臨済僧としての一休という位置づけがどうなるのか、不明と言わねばならない。一休研究が「禪文化」の枠組みを超えて、宗門の問題となりうるかどうか、ということである。さらに、内容について言えば、例えば、柳田聖山の「初期禅宗史書の研究」は確かに研究の手法こそ緻密ではあるが、内容はこれまで重視されてきた南宗禅の系統に対して、北宗禅の歴史的意思を浮き彫りにしようとしたものであり、宗門が抱いてきた南宗を中心とする禅宗史観からみれば、これは明らかに一種の「反発」と受け止められるであろう。「型」や「体制」への「反発」という点で一貫しており、その点では柳田聖山は正直な禅研究者だったと評者は評価したい。

ともあれ、これらの点が、あくまでも評者から見て気になった点であり、それらは本書の画期的な試みや学術的な価値を損なうものでは決してないし、本書の斬新な視点は一休研究に新しい道を開いた点でも変わりはないと認められる。書評の任を終えるにあたり、評者が最後に著者に求めたいのは、終章で述べられているような方向から、研究を進め、さらなる成果を挙げていただくことである。室町時代の中の一休、つまり「歴史上の一休」の像が果たしてどうであったのか、逆に気になって、仕方がないからである。